

速記の歴史

西洋の速記

西暦紀元前480年ごろペルシャ王クセルクセス (Xerxes) が、大軍を率いてギリシャに遠征したとき、命令を速く伝えるために、速記者を使ったという伝説があるが、実物は残っていない。

また、紀元前400年ごろギリシャの哲学者であり、歴史家であったクセノフォンが、自分の先生であるソクラテスの口述を筆記して出版したと言われている。それは3世紀のローマの著述家ディオゲネス・ラエルチウス (Diogenes Laërtius) が「クセノフォンは会話をそのまま書きとめた第一人者である」といったというのでよく例に引かれるが、恐らく意味筆記程度ではなかったかと思われる。

ギリシャの速記

世界で最も古い速記の史料は、ギリシャのアクロポリス (小高い所という意味) の廃墟から発見 (1884年) された大理石の破片で、それには簡単な符号で碑文が刻まれていて、クセノフォンに捧げた言葉や、アリストテレスに捧げた言葉であることが判読できたので、その符号のことをアクロポリス式と言われている。また、同じギリシャのデルフィでも、日常の筆記事務用として考案をされたらしい速記符号とその図表が発見をされている。この方はデルフィ式と言われている。これらの古代ギリシャ人の書いた速記原本は、現在、ローマのヴァチカン図書館、パリの国立図書館、大英博物館などに実物が保存をされている。(Enciclopedia Italiana 参照)

ローマの速記

速記の起源を説くものは、だれでも必ず「ティロの速記」(Notae Tironianae) を例に引く。この有名な最初の速記法は、普通文字を使いたいいわゆるタキグラフィ (Tachygraphy) で慣用語や頻出語は頭文字だけを書き、他の言葉と混同をされそうなときは、それを逆さまに書くとか、次の字を書き加えたり、その他の字は省略する方である。また前置詞にはある種の簡単なサイン (sign) が用いられていた。さらに進んでアルファベットの文字を簡単にし、数語をあらわすのに主な子音の画線だけを一まとまりに書くという方法も使われていた。

マルクス・トゥルリウス・ティロ (Marcus Tullius Tiro 紀元前94～紀元4年あるいは紀元前103～紀元前4年) は初めマルクス・トゥルリウス・キケロ (Marcus Tullius Cicero 紀元前106年～紀元前43年) の奴隷だった。後に解放をされて自由人となり、主人のキケロの演説を速記したので、最初の速記実務家 (速記技術者) として知られている。

紀元前63年、カティリナの陰謀を摘発するため小カトーが元老院で「カティリナ弾劾演説」をやったとき、ティロはキケロの命令を受けて、院内各所に速記者を配置し、

自分も速記に当たった。

「カティリナよ、おまえは我々の忍耐をいかに長いこと浪費したことか？」

(*Quosque tandem abutere Catilina, Patientia nostra?*) という冒頭の一句を聞くやいなや、ティロは即座に「QPN」とたった3字で書き取った、と伝えられている。

ローマの速記は、近代の速記法のように音を中心に組み立てたものではなく、一語、一語、符号を覚えなければならず、1世紀の中ごろには約5,000、後には1万数千もの略符号を覚えないと演説を書き取ることができなかつたので、学習は極めて困難であり、完全にマスターをするのには10年もかかったと言われている。最初のころは、数人の速記者が手分けをして、各人の判断で、あるいは合図によって6語ないし8語ずつ演説者の発言についていけるように連続して書いていき、後でみんなのノートを読み合わせて全体の演説を言葉どおりに再現をする方法が採用をされていた。

その後多くの人によって次第に改良をされ、裁判、会議等、公の記録はもちろんのこと、個人的な著述、通信、メモなどにも速記が応用されるようになり、上は皇帝から、下は奴隷に至るまでみんなが速記の研究をしたという速記全盛時代があった。当時の速記者はろう板に石筆（後には鉄筆）でひっかくようにして符号を書いていた。

ローマ帝国の滅亡とともに速記もまた衰滅の一路をたどり、わずかに僧院にその面影が見られるという程度で、11世紀の終わりにはティロ式もほとんど姿を見せないようになっている。この間には速記の符号が暗号のかわりに使われたこともあった。修道院の写字生が人民 (people) を ppl と書き、エルサレム (Jerusalem) のかわりに Jm と書いていたのもこのころである。(この項イリンの「書物の歴史」参照)

中世のこの時代は、速記にとっても全く暗黒時代だった。この状態はイギリスの速記が始まる16世紀末まで続いた。

イギリスの速記

1588年(天正16年：秀吉の関白時代) 医学者で考古学者で牧師でもあるティモシー・ブライト (Dr Timothy Bright 1551~1615年) は、考古学の研究中偶然のことから1600年前に埋没したティロの速記法を発見し、これに自分の考案を加えて「記号論 (キャラクター) (Characterie) という本を著した。これは近代速記の最初の著書である。この方式は符号を縦書きにするようになっていたためか、余り実用にはならなかったが、ブライトは近代速記の始祖とみなされている。

1602年(慶長7年)には国教派の牧師ジョン・ウィリス (John Willis 1575~1627年) の「速記術 (Art of Stenographie) 普通人であればだれでも学び得る簡明な法則による教授、あらゆる職場に利用できる、簡単な書記方法」という小冊子が出版された。この方式は発音学の原理を初めて英語速記に適用したもので、最初のアルファベット式速記法として注目すべき方式である。その符号はVZなどはローマ字のまま使い、AはΛ、Eは<とする程度で、今日の進んだ速記から見れば極めて幼稚なもの

である。また、当時の速記者は一々ペンにインクをつけて書いていたので、大変忙しい思いをしていた。「ステノグラフィー」(Stenography)という言葉が最初に使ったのはウィリスである。

1620年にシェルトン (Shelton)、1646年にリッチ (Rich)、1672年にメーソン (Mason)、といずれもアルファベットの符号化に苦心をしている。YとZだけはまだ文字のままだった。メーソンの流れをくむトーマス・ガーネイ (Thomas Gurney) は1737年にロンドンの裁判所速記者に任命をされ、以後その後継者がその職を継いでいる。現在ではピットマン (Pitman) が採用をされている。

1767年に発表されたバイロン (John Byrom) の方式では、アルファベット全部が符号化され、日本の田鎖式系統で今日固定化された感のあるMが (Nが)、Tが | などの源流が見られるのは、なれぬ他国で知人に会ったような、なつかしい気がする。このバイロンを「チャイルド・ハロルドの巡礼」で有名な詩人のバイロン (1788～1824年) と同一人物のように説くのは間違いである。

オックスフォード大学の哲学教授であったサミュエル・テイラー (Samuel Taylor) の方式は1786年に出版をされたが、さすがに方式の基準確立を提唱して世界的名声を博した人の労であるだけに、各国語への適用翻案に成功したことは特筆すべきである。

ベルタンによってフランス語に (1790年)

フリードリヒ・モーゼンガイルによってドイツ語に (1796年)

ホルスティヒ及びダンツァーによってドイツ語に (1800年)

フランシスコ・デ・パウラ・マルティによってスペイン語に (1800年)

アマンティによってイタリア語に (1809年)

ステッガーによってオランダ語に ()

ペイレラによってポルトガル語に (1800年ごろ)

コヴァーチスによってハンガリー語に (1821年)

プレヴォによってフランス語に (1827年)

ピスズによってポーランド語に (1838年)

ハンサード・デベイツ (英国議会議録) に速記が採用されたのは1803年以降のことであり、イギリスでは速記が発明されてから200年ばかりたってやっと国会の記録が速記によってつくられるようになった。この点、日本では田鎖綱紀の発明後8年で、明治23年に国会開設と同時に速記が採用されたので、時代と条件が違うとはいえ、やはり多くの人の苦心と努力によって理論と技術が長足に進歩をした。

アイザック・ピットマン (Isaac Pitman 1813～1897年) は、ローマ字の形とは全然関係のない、簡単な幾何学的な直線や曲線によってあらゆる言葉の音を書きあらわすことのできる符号を創案し、その符号の組織と運用の理論を1837年に発表をした。これは後に「速記的英語記音法」(Stenographic Soundhand in English) として出版され、1部4ペンスの普及版で広く一般に読まれた。

現在世界各国で行われている逐語速記は、多かれ少なかれ、直接的にしる、間接的

にしる、ピットマン式の影響を受けていないものはない、と言ってもいいぐらいである。ピットマンはその功績によって1894年にヴィクトリア女王から騎士の称号を与えられた。

フランスの速記

フランスでは1651年にジャーク・コサール (Jacques Cossard) によって初めて神学関係の筆記の近代化 (線状化) が試みられた。最初の近代速記法として注目になるのは、クロン・ド・テヴノ (Couion de Thévenot) の「タキグラフィ」 (Tachygraphie) がある。1790年に発表されたベルタン (Théodore Pierre Bertin) の方式は、イギリスのテイラー式をフランス語に応用したもので、フランス全体に普及をした。フランス速記の父と言われているコナン・ド・プレペアン (Conen de Prépéan) は1813年、各式の長所を採ってフランス語に最も適した速記法を案出した。1827年に方式を発表して1870年まで上院の速記監督をしていたイリポート・プレヴォ (Hippolyte Prévost) もテイラー式を最も巧みに応用した1人である。プレヴォ式は、1866年にアルベール・ドゥロネ (Albert Delaunay) によって改良が加えられたのでプレヴォ=ドゥロネ式と称されている。エーメ・パリ (Aimé Paris 1822年) の直系であるエミール・デュプロワイエ (Emile Duployé 1867年) はプレペアン式に多くの改良を加え、デュプロワイエ学会式として、フランスばかりではなく、フランス語を使用する国々 (スイス、カナダ) に今日も広く用いられている。その他にもビュイソン式 (Buisson)、カントン式 (Canton)、デュポン式 (Dupont) など、みなデュプロワイエ式系統のものである。

ドイツの速記

ドイツで最古の速記方式は1679年のフランクフルトで出版されたラムゼー式 (Ramsay) である。これはイギリスのシェルトン式の応用である。1796年に発表されたモーゼンガイル式 (Mosengeil) もまた英語速記法の翻案である。モーゼンガイルは1819年にさらに第2の方式を発表している。

元来ドイツの速記法は、英仏系の方式とはシステムが違っている。英仏系の正円派 (幾何派) に対して斜線派 (草書派) と言われている。それはドイツ特有の亀の子文字筆記体を利用した斜線の多い符号で、文字式に似た、特色のある符号体系である。その代表的なのが1834年に発表したフランツ・クサフェール・ガベルスベルガー (Franz Xaver Gaberger 1789~1849) の方式である。ガベルスベルガーは新しい速記理念によってドイツ語速記法の上に一新紀元を画したと言われている。ガベルスベルガー式は各国語に翻案されている。

1841年にはヴィルヘルム・シュトルツェ (Wilhelm Stoize 1798~1869年) の方式が発表をされた。ガベルスベルガー式を基本にして、改良、発展させたものである。シュトルツェ式は後に門下のフェルディナント・シュレー (Fernand Schrey 1850~

1938年)が1847年にシュトルツェ=シュレー (Stoize-Schrey) 式を発表している。シュトルツェ=シュレー式を日本語に翻案したデーゲン式は実用化をされなかった。

日本の毛利式はガベルスベルガー系のファウルマン式 (Faulmann 1875年) を日本語に翻案し実用化をされている。

アメリカの速記

共和制が布かれたころにはテイラー式やガーネイ式がアメリカに紹介をされていた。ピットマン系の方式は、ロングレイ (Longley 1849年)、ベン・ピットマン (Benn Pitman 1853年)、グラハム (Andrew G. Grafam 1858年)、リンズレー (Lindsley 1864年)、マンソン (Munson 1867年)、バーンズ (Burnz 1871年) などが次々と発表をされた。1882年には全米で1万数千人の速記学習者を出したという統計がある。

1878年に楕円派のクロス式 (Cross) が発表され、1888年には楕円派の代表ともいうべきグレッグ (Jhon Robert Gregg) の「淡線速記法」 (Light Line Phonography) が出版された。この方式は自然な運筆のできる曲線 (楕円) を主体にして左上から右下に行く線や濃線、位置など使わないのが特色である。日本語の翻案には酒井伍作の酒井式、宅間清太郎の宅間式、岡村キクエの日本グレッグ式がある。

ステノタイプ (機械速記) というのは、ワード・ストーン・アイアランド (Ward Stone Ireland) が1912~1915年に創案した印字式速記方式である。超小型の特別構造を持ったタイプライターで、発言を聞きながら暗号に似たローマ字記号を両手で打って記録し、後でその記号を普通の文字に書き直す。機械が自動的に何もかもしてくれるわけではなく、手でシャープやペンを持って符号を書くかわりに、タイプでローマ字を印刷する。日本でも独自に開発をして裁判所でソクタイプとして使用をしている。

*この項は

速記入門ハンドブック：西来路秀男 (昭和30年・ハンドブック社)
を引用した。

日本の速記

我が国の速記史については、社団法人日本速記協会から「日本速記百年史 (附 日本速記年表)」が刊行されているので、我が国の速記史については記述を省略した。

特に指導者は「日本速記百年史」を必読をしてもらいたい。

参考文献

速記入門ハンドブック：西来路秀男 (昭和30年・ハンドブック社)
萬国速記史：兼子次生 (昭和55年・大阪早稲田速記専門学校)

速記方式の基礎

速記方式の基礎

速記方式を大きく分類をすると、符号式、文字式、印字式となる。符号式速記とは速記用の特殊な符号（簡単な記号）で構成されており、符号式には、単画派、折衷派、複画派、草書派がある。現在では、符号式の折衷派と単画派が主流を占めている。

複画派……50音のうちア行とア列が単線である以外は、すべて複線が使われている。（例外として、ア行とウ列が単線である以外はすべて複線が使われている方式もある）

折衷派……複画派におけるエ列、オ列を単純化したものである。つまりオ列をア列の倍線とし単純化を図ったものである。折衷派には複画派に近いものと、単画派に近いものがある。

単画派……折衷派におけるイ列、ウ列、エ列を単純化したものである。ア列の方向を変えたり、濃線化してイ列としたり、その倍線をエ列とする。ア列の半線をウ列とする。

草書派……速字の運筆を滑らかにするために、ローマ字の綴りを利用しているが、複画派に近いが別なものである。斜線派ともいう。

なお前に上げた折衷派は、複画派と単画派の間をいくものであるが、「複画派と単画派の長をとり、短を補って」できたものではない。初めに複画派と単画派があつて、その中間的存在として折衷派があらわれたのではなく、複画派から単画派への移行への過渡的存在である。

また、基本文字のみで複画派、折衷派、単画派と分類をすることには問題があるが、速記は最終符号体系において、速記文字の画数がいかに少なくなったかということが重要なことである。ここではあえて分類上の参考として複画派・折衷派・単画派という言葉を使用した。

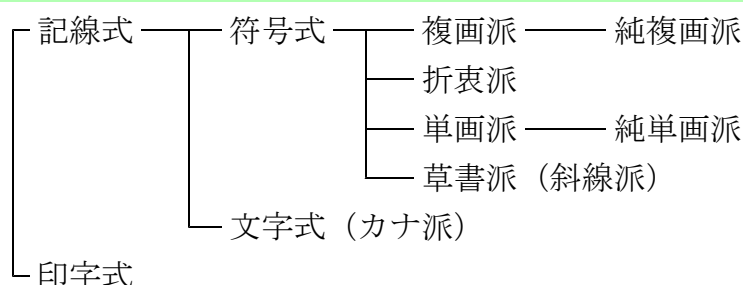
文字式……カナ文字にいろいろと工夫を加えてスピードを出そうとしたものであり、別名をカナ派という。

1. カナ文字を崩した方式。
2. カナ文字を応用した方式。
3. カナ文字の一部分を利用した方式

印字式……速記用のタイプであり、通称「ソクタイプ」と呼ばれているものであり、裁判所で使用されている。現在はパソコンに接続して「はやとくん」「ステンチュラ」が使用されている。

平成3年に早稲田速記教育研究所が速記用のワープロ「ステノワード」を開発し、実用化している。現在はパソコン用のキーボードを発売している。

速記方式の分類



現在指導されている方式 (平成28年7月現在)

カナ式、熊崎式、V式、ステノワード、中根式、日速研式、早稲田式がある。

速記方式数

我が国の速記方式の数は何方式ぐらいあるかと聞かれて、大体の数字を答えることができる人はどのぐらいいるだろうか。

まずこれには3つの意味が込められている。

1. 現在指導をされている方式数。
2. 現在使用をされている方式数。
3. 明治15年に田鎖式が発表されてから今日に至るまでの方式数。

ここで取り上げるのは、もちろん3の方式数である。まず各方式のテキストを調べると、ほとんどのテキストについては、はっきりした数は書かれていない。つまり現在残っている方式数とか、あるいは主な方式ぐらいしか書かれていない。

昭和40年発行の田鎖76年式「速記の完全独習」(田鎖源一著)では約70。

昭和42年中央大学速記研究会発行の「早稲田式速記詳解」(吉川寿亮著)では80余り。

昭和48年発行の石村式「石村式速記講座」(石村善左著)では約80種。

昭和48年の早稲田式通信教育のテキスト「早稲田式速記講座」では約80。

昭和50年発行の小谷式「日本語速記法S V S D 50」(小谷征勝著)では100を超える。と掲載されている。

では実際には何方式あるのかということについて考えてみたい。この方式数は人によって方式として認める基準が異なっている。

1. 速記実務者が出なかった方式。
2. 実用化をされなかった方式。
3. あくまでも机上の空論として終わった方式。
4. 速記方式としてはインチキくさい方式。
5. 母式と基本文字は同一であるが縮記法、略記法が異質の方式。
6. 実用化されたが後継者のいない方式(創案者自身は使用をしたが、弟子に指導していない)。